

研究課題 (テーマ)	地域統括がん相談支援センター相談員が出会った困難事例に関する調査研究		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	准教授	比嘉 肖江
分担者	富山県がん総合相談支援センター	統括相談員	尾川 洋子
研究結果の概要			
<p>本研究の目的は、富山県のがん診療連携拠点病院外にある「地域統括がん相談支援センター」の相談員3名が抱える困難と課題を明らかにすることである。</p> <p>対象とした相談員3名に「がん看護に関する困難感尺度」を利用した質問紙調査および半構成的面接を行い、質問紙調査を量的記述分析、面接内容を質的帰納的に分析した結果、以下を得た。</p> <p>1) 相談員3名の「がん看護に関する困難感」は、先行研究にある一般病棟の看護師と緩和ケア病棟の看護師の困難感と比較して、「告知・病状説明」「看取り」に関しては、一般病棟看護師とほぼ同等の困難感を示し、「自らの知識・技術」に関しては、一般病棟・緩和ケア病棟看護師より高い困難感を示していた。一方「システム・地域連携」に関しては、一般病棟・緩和ケア病棟看護師より困難感は低かった。</p> <p>2) 相談員3名が抱える困難は【主体】→【内容】→【帰結】で構造化された。</p> <p>【主体】は<相談員自身><相談者><組織>に分類された。<相談員自身>の困難の【内容】は<彷徨グリーフ><どこから手を付けたらいいかわからないAYA世代><命名されない不安><福祉制度><相手が見えない電話相談><終わりのない相談><相談員の資質>に分類された。<相談者>(地域で暮らすがん患者や家族)の困難の【内容】は<彷徨グリーフ><命名されない不安><福祉制度><終わりのない相談>に分類され、相談員によってその内容が明らかにされた。<組織>の困難【内容】は、<彷徨グリーフ><どこから手を付けたらいいかわからないAYA世代><命名されない不安><相手が見えない電話相談><終わりのない相談>に分類された。困難の【帰結】については、<終結><継続><不明>に分類された。</p> <p>3) 相談員3名が抱える課題は、《グリーフ》《AYA世代》《終わりのない相談》《顔の見えない電話相談》に分類された。《グリーフ》には、時間や経過、個人の背景や環境に応じた対応が求められていた。《AYA世代》には、就労、妊孕性、家族関係など社会的な側面を有しているため、教育現場や雇用関連に働きかける必要性があった。《終わりのない相談》には、治療は終わったが再発への不安に終わりがなく、治療終了後の病院から離れた不安などがあった。また、そこには、がんに関連する不安を抑圧し家族と共有することができない患者がいた。《顔の見えない電話相談》には、面識のない相談者が何を求めて電話相談をしてくるのか、相談者の真意を察知する相談員のアセスメント力が求められていた。</p>			
今後の展開			
<p>2020年度中に、がん看護学会誌に投稿予定である。がん診療連携拠点病院外にある「地域統括がん相談支援センター」は、国内に14か所しかないにもかかわらず、情報共有や交流はされていないのが現状である。今回は、国内すべての相談支援センターの相談員を対象に質問紙調査および半構成的面接調査を行い、センター間の情報共有や交流につなげていく予定である。</p>			